



高校野球のマナーとルールを学ぼう (第29回)



一般財団法人兵庫県高等学校野球連盟

グラウンドでの試合を振り返り、高校野球の大切なマナーとルールを学びましょう。
あなたの「なぜ? どうして?」にわかりやすくお答えしていきます。

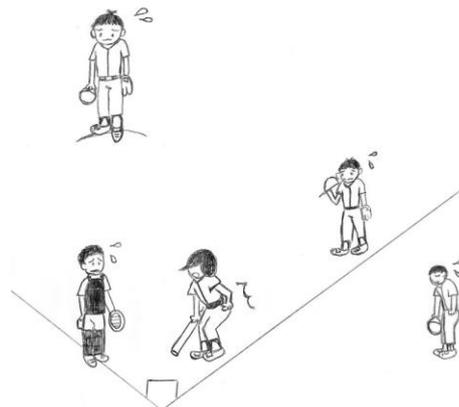
マナー編 「デッドボール」とは…。用語の意味を確認しましょう。

投球が打者の腰を直撃しました。投手はもちろん、捕手や一塁手も脱帽して打者走者に声をかけています。ベンチの一番前では監督も脱帽しており、申し訳なさが伝わってきました。

思いがけなく相手に痛手を負わせたとなると、まずは素直な言動を忘れてはなりません。プロ野球で危険球退場を宣告された投手が、詫びることもなく、時にはつばを吐いたり、ふてくされてマウンドを降りるのは対照的です。

ところで、一般に“死球”＝“デッドボール”と受け止めている人がまだまだ多いかもしれません。規則6・08(b)に規定される「打者が打とうとしなかった投球に触れた場合」を表す用語は、“hit by pitch(ヒット・バイ・ピッチ)”です。公認野球規則の“dead ball(デッドボール)”は、“live ball(ライブボール)”の対語で、“試合停止球”を意味するからです。

「“デッドボール”ではなく、“ヒット・バイ・ピッチ”と言おう!」との呼びかけ発信からすでに10年が過ぎました。日本高野連はベースボールという球技を正しく理解するため、用語の整備にも努めていますが、中継放送など報道関係も変更し踏み切れていない現状です。例えば、ボールカウントが“B”・“S”順に改正されたのも高校野球から時間を要しました。国際試合も増え、「野球」という日本だけのスポーツ競技ではありません。常に基本を大切にしながら「ベースボール」を共有したいものです。



ルール編 死球のペナルティと臨時代走者

公認野球規則8・05のペナルティに、「本条各項によってバークが宣告されたときは、ボールデッドとなり、各ランナーはアウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、バークにもかかわらず打者がヒット、失策、四死球その他で一塁に達し、かつ他のすべての走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、本項前段を適用しないでプレイはバークと関係なく続けられる。」とあります。つまり走者が詰まっていないとき(たとえば、走者二・三塁)は、バークのペナルティが適用され、その投球が死球のときは、両走者に安全進塁権を与えて、得点1、走者三塁、打者は打ち直して試合が再開されます。一方、高校野球特別規則6には、「試合中、攻撃側選手に不慮の事故などが起き、一時走者を代えないと試合の中断が長引くと審判員が判断したときは、相手チームに事情を説明し、臨時の代走を許可することができる。(後略)」とあります。具体的には、打者が頭部に死球を受けた場合がその代表例です。

この2つの規則から、頭部死球を受けた場合でも打者は打ち直しとなるケースがありながら、高校野球では、「選手の安全に配慮した臨時代走を許可する」ことが基本的に守られてきました。そこで、新たに高校野球特別規則22に、「**走者二塁、三塁、二・三塁、一・三塁時に投手がバークをして、投球が打者の頭部に当たった場合、高校野球ではバークがなかったものとし、打者(臨時代走者)を一塁へ進め、走者は元の塁で試合を再開することとする。ただし、正式試合の最終回の裏、または延長回の裏で試合を決するような場合(走者三塁、二・三塁、一・三塁)は、投手のバークを適用する。**」と定められたのです。

このような事例の発生は珍しいかもしれませんが、改めて『高校野球特別規則』の意義を理解し、習熟に努めましょう。